
セレナーデ

白鳥炎応

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

セレナーデ

【Nコード】

N7978A

【作者名】

白鳥炎応

【あらすじ】

その者の名前は小夜さやと言う。どんな願いも叶えることができる特別な力を持つ死神。彼に出会うことができるのは、もうすぐ死んでしまう人間。願いを叶える対価は彼に己の魂を差し出すこと。

第一話 伊藤比呂の場合1（前書き）

私がずっと温めていたある死神の物語です。
シートベルトは着用できましたか？
それでは、行ってらっしゃいませ。

セレナーデ

第一話 伊藤比呂の場合1

彼の名前は伊藤比呂。

公立高校に通うごく普通の男子高校生であった。

運動神経が昔から良くバスケットボール部のエースで将来も有望であった。

だがそれは、先月までの話だった。

「脳に悪性の腫瘍が発見されました。非常に切除するのは難しい部分にあり、残念ですが手術の成功率は2割です。」

「先生、はつきり言って下さい。俺は・・・後、どのくらい生きることができるんですか？」

医師はこう告げた。

「後、半年です。」

比呂は脱脂綿が入った銀の入れ物を床にぶつけていた。脱脂綿は散らばり、くすんだ色をした床を白く彩った。

「何で?! 何で俺なんだよ?! 何で俺が後半年で死ななきゃならねえんだよ! 何でだよ! 何でなんだよおおお!!」

比呂は医師の胸ぐらを掴み、怒りをぶつけた。医師は黙ったまま比呂を見ていただけだった。

病院の帰りに医者に処方してもらった薬をぶら下げたまま、比呂は力なく歩いていた。ふと空を見上げると、橙色に輝く夕日が哀しく見えて涙が出てきた。

「見事な夕日だな。」

突如聞こえた声に比呂は驚いて振り返った。

「はははっ、すっげえ驚いてる。マジウケる。」

比呂の振り返った先には、長身に漆黒のスーツをまとった白髪の

男だったのだ。

「な・・・なんなんだよ。いきなり。」

「失敬失敬。笑ったお詫びにこれ、どうぞ。」

白髪の男は比呂に小さな手さげ型ビニール袋を比呂に渡した。中は身はパツクに入った、たこ焼きだった。焼きたてなのかまだ温かかった。

「じゃ、また後で。」

白髪の男はそう言って、比呂の横を通り過ぎていった。

比呂は何が起こったのかわからず、しばらくそこに立ち尽くしていた。

両親が共働きの為に、比呂は夕食を一人で食べた。

両親に自分の病気のことを何と話そうか。後半年の命だと告げていいのか、悩みながら食べていた。

夕食の片付けを済ませ、風呂に入った比呂は自室のドアを開けた。「たこ焼きうまくかったか？」

夕方会った白髪の男が比呂の机に備え付けてある椅子に座っていた。

「な、な、何であんた俺の部屋に?! 出てけよ! 警察呼ぶぞ!」

「お前に警察は呼べない。嘘だと思ったら、携帯で『110』って押してみる。」

比呂は携帯電話に『110』と押そうとした。

だがどういいうわけか指がうまく動かない。力を入れてボタンを押しそうとするが、無駄に力を使って疲れてしまった。

「呼べねえだろ。」

「くそっ!」

比呂は携帯電話を乱暴にベッドに投げつけた。

「あんた何者なんだよ? 何で俺の名前知ってるんだ。俺とあんたが会ったのはさっきだぞ。」

「自己紹介遅れたな。俺の名前は小夜^よ、死神だ。」

第一話 伊藤比呂の場合1（後書き）

ネタバレ：実は、一部の方はご存じだと思われませんが、『墮天使が奏
でる鎮魂歌』で登場した最勝寺雪成さいししょうじゆきなりの兄・正雪の物語です。彼は現
世で罪を犯して亡くなったため地獄で死神となったのです。感想・
ご意見頂けると嬉しいです。

第二話 伊藤比呂の場合2（前書き）

さあさあ皆さん寄ってらっしゃい読んでらっしゃい！長らくお待ち
せ「セレナーデ」第二話の始まりですよー！

セレナーデ

第二話 伊藤比呂の場合2

「自己紹介遅れたな。俺の名前は小夜^{こや}、死神だ。」

小夜と名乗った白髪の男は比呂を見て、にやりと笑った。

「し、死神?! 死神ってあの、死ぬ前に現れて魂取るっていうあれか?」

「まあな。」

「俺の魂を取りに来たのか。」

比呂は自分を嘲笑うように言った。顔は自然と下へ向かう。

「・・・脳みそに悪性の腫瘍。手術を施したとしても、成功の確率は2割。余命は後、半年。」

比呂は驚いて目を見開き、小夜の方へ顔を向ける。

「何でそのこと知ってるんだ? あの医者から聞いたのか?」

比呂に関する情報を、小夜はほぼ正確に言っている。比呂の病状を知っているのは、彼を診察した医師だけである。

比呂はこの死神を名乗る男のことを気味が悪いと思い始めた。

「声が震えてるな。怖がらせるつもりは・・・っておい!」

比呂は小夜の手を掴んだ。小夜の手が程よく温かいのを妙に思いつつ自室のドアを開け、階段を早足で下っていく。

「なあ、比呂。」

「気安く呼ぶな!」

110番を押すことが不可能なら、直接交番へこの男を突きだせばいいんだ。比呂はそう考え、玄関のドアを勢いよく開けた。

「あら比呂おかえりなさい。夕飯は食べたの?」

姿を現したのは比呂の母親だった。仕事帰りで疲れが顔に出ていたが、息子に笑顔を見せる余裕はあるようだ。

「母さん! 不審者が家に入ってきたんだ! 今捕まえたから、俺今から交番行ってくる!」

「え?! あなた大丈夫だったの?! それで不審者はどこなの?!」

比呂の母親は家の辺りをあちこち見回した。

「だから！今俺が捕まえてるんだって！」

「どこ？どこななの？」

「だから！今俺の隣にいるんだって！ほら！」

比呂は自身の手で掴んでいる小夜を母親の前に突き出した。

小夜の体が比呂の手によって一歩前に出ることとなった。

「・・・誰も、いないじゃない。」

比呂の母親は首をかしげる。

「母さん！信じてくれ、俺嘘なんかついてな・・・」

「比呂、ごめんなさい。私、明日朝早く出るから今日はもう休むわね。朝食は用意しておくからちゃんと食べなさいね。おやすみなさい。」

比呂は必死に訴えは、彼の母親の体を支配する疲労の前には勝てなかった。

比呂は、疲れきった母親が風呂場に消えるのを黙って見送った。

「よかったな、お前のお袋さんには俺の姿は見えなかった。死期はまだ先だと言う証だ。」

比呂の手が力を無くした小夜の手から離れていく。

「俺の姿が見ることができるのはもうすぐ死ぬ人間。そして、もうすぐ死ぬ人間の願いを叶える。それが俺の仕事だ。さあお前の願いを聞かせてもらおう、比呂。」

第三話 伊藤比呂の場合₃ (前書き)

お待たせしました。セレナーデ第三話、始まります。

セレナーデ

第三話 伊藤比呂の場合3

比呂は苛立ちを露にするように、二階の自室へ向かう階段を音を立てて上がっていった。無論小夜も比呂の後に付いて階段を上がった。

比呂は小夜が何か言ってくるのではないか、と思っていた。もし言ってきたのならば暴言を吐いてやるつもりでいた。

だが小夜は比呂の気持ちを察してなのか無言で比呂の後についてきた。

比呂は自室にたどり着くなりベッドにごろりと寝転んでしまった。小夜は比呂の机に備え付けてある椅子に座った。ふと小夜を見やると、彼は何か考え事をしている顔付きになっていた。

比呂の頭に意地悪な考えが浮かんだ。

「あんだ。」

比呂に呼ばれ、小夜は比呂の方へ視線を動かした。

「いやあんたはもうやめるよ。小夜、あんたってこの世で悪いことしたから死神になったんだろ？どんな悪いことしたんだよ？俺に聞かせてくれよ。」

比呂は小夜に尋ねている内に楽しい気持ちになってきていた。

どうせ助からない命であるならば、自分の目の前に現れたこの男の事情を詮索して何が悪いと言うのか。

比呂の問いに答えるように、小夜は喉をくつくつ鳴らして笑った。

「胸やけするかもしれない。それでもいいのか？」

比呂は早く話せと急かした。

「自分の妹に手をだした。そのことが自分の母親にバレて母親を殺した。母親を殺した後妹に殺された。」

比呂の心から楽しいという気持ちが消え失せた。小夜の言う通り胸やけはしなかったが、自分の胸に空洞が生まれ、空洞から冷たい風が通りぬけていくような感覚に陥った。

「…………マジ？」

この言葉しか出てこなかった。

「マジ。比呂に聞かれたから答えただけ。」

小夜は平然と答えた。

平然と答えたのが、悲しさを増長させてしまった。

「さてさて俺の話は終わり。」

小夜はそう言うと、指をパチンと鳴らした。

比呂は急に睡魔に襲われ、そのまま眠りに落ちた。

第四話 伊藤比呂の場合4（前書き）

これで比呂のお話は終わりです。はてさて彼の願いとは？！
感想・ご意見お待ちします。

セレナーデ

第四話 伊藤比呂の場合4

「比呂、俺が叶えることができる願いは一つだけだ。よく考えて返事をくれ。」

小夜の声に答えようとした所で、比呂の目は覚めてしまった。窓からは朝日が差しこんでいた。

小夜の姿は消えてしまったと、比呂は認識した。

「昨日のことはみーんな夢・・・なわけねえだろ。」

突然耳に入ってきた声に驚き、うわあっと比呂は声を上げた。わかりやすい奴と言いながら、声の主は笑っていた。

「小夜?!」

「正真正銘、死神様の小夜ちゃんですよ。」

「胡散臭え、何が正真正銘だよ。」

「それより支度しないと学校遅れるぞ。」

やべえと言いながら、比呂は寝巻きを脱ぎ、母校の制服に着替え始めた。

小夜は窓の外を見ていた。

人間でないとはいえ、同姓の着替えを見るのは小夜の趣味ではない。比呂の着替えが終わるまで、窓から見える景色を眺めることにした。

朝日が白く光を放つ。電信柱に止まる数匹のすずめが気持ち良さそうに歌う。

自分も人間だった時に見ていた景色。

当たり前にあつたものが、今はこんなにも懐かしい。

「小夜。」物思いにふけていた小夜を比呂が呼んだ。

「着替え終わったのか。」

「俺の願い、決まったよ。」

聖マグダリア女学園1年A組、伊藤千比紹いちいづかはクラス委員だけが集まる代表会議が終わり、下校する支度をしていた。

「はぁーあ。」

千比紹の口から大きな溜め息が出る。学期始めに行われたくじ引きで決まったとはいえ、クラスの委員長なんて疲れる。

クラスの委員長なんて聞こえが良いだけで、実際はクラスメイトと生徒会執行部の板挟みの中間管理職ではないか、と千比紹は考えている。

「下校時刻となりました。まだ校舎内に残っている生徒は、早く下校しましょう。」

いけないっ！と思い千比紹は鞆を抱えて、急いで正門へ向かった。運動神経がそれ程良くない千比紹は、息を荒くしながら廊下を走っていた。

「はぁっ……はぁ……はぁ。」

正門を出た千比紹を、ある人物が待っていた。

「まったく相変わらず足遅えなあ、千比紹。」

「?!」

千比紹の声の先には、意地悪な笑みを浮かべた少年が立っていた。千比紹の記憶に、十年前の記憶が蘇る。

忘れもしない、彼は千比紹の小学校のクラスメイト。そして、いつも千比紹をいじめていたクラスのカキ大将。

「比呂……伊藤比呂。」

「久しぶり……」

比呂が再会の挨拶を言うのを遮り、千比紹は平手を比呂の頬を張った。

「何しにきたのよ！って言うか何で私の通う高校知ってるの?!まさか調べたわけ?!」

比呂は黙っていた。比呂の腫れた頬が橙色の夕日に照らされる。「忘れたとは言わせないわよ！あんたに付けられた背中 of 痣！」

千比紹の背中 of 痣は、小学校の時に比呂によって付けられたのだ。いつもはおとなしくいじめられている千比紹が、珍しく比呂に反撃をした。比呂の手に千比紹は噛みついたのだ。

頭に血がのぼった比呂は、そのまま逃げようとした千比紹の背中を拳で殴ってしまったのである。千比紹は激痛の余り声も出さずぐまっただま涙をこぼし続けていた。

あの時も、窓からは今日と同じ橙色の夕日が二人を照らしていた。「背中 of 痣で私がどれだけかわれて、陰口叩かれたかわかったんの？！全部、全部あんたのせいなんだから！あんたがあんなことしなきゃこんな目に遭わずに済んだのに！」

千比紹の目頭があつと熱くなる。涙が溢れてくるのを抑えるのが必死だ。

「こんな、自分に痣を付けた馬鹿男に涙なんか見せたくない。

「あんたなんか！あんたみたいな馬鹿男！死んじゃえ！」

「お前に言われなくても死ぬよ。」

そう言つと、比呂は千比紹を抱きしめた。千比紹は驚きの余り、体が固まってしまった。

「今更だけどごめん、千比紹。」

比呂の手が千比紹の背中に回る。千比紹の体はこわばった。

「大丈夫。お前 of 痣は俺がもらつていくよ。」

千比紹の背中が温かくなった。だが不快に感じる温度ではなかった。

比呂は千比紹から体を離れた。

「じゃあな、千比紹。」

比呂は背を向け、走つていった。

「・・・待つて！待ちなさいよ、比呂！」

千比紹は急いで比呂を追つたが彼の姿は見つけられなかった。

「どうだ！かつちよよくねえ？小夜。」

比呂はにっこり笑って小夜に背中を見せた。

「お前の願い。『伊藤千比紹の背中を、自分の体に移す。』確かに叶えた。」

「なんだよ！似合ってる、とか言えよ。気の利かねえ奴。」

淡々と言う小夜に対し比呂は、口ではそう言うものの顔は清々しい笑みを浮かべた。

「お代は俺の魂だろ？どうやって支払えばいいんだ？」

「比呂、左手を出せ。」

ああ、と言って比呂は左手を小夜に差し出した。

小夜は、比呂の左手を固く握った。すると比呂の手から掌サイズの光の球体が現れ、小夜の掌に吸収された。

「支払いありがとう。」

「ありがとな小夜それと、ごめんな。」

それが比呂の最期の言葉になった。

第四話 伊藤比呂の場合4（後書き）

なんだか少女漫画みたいな終わりかたやもしれませんと思いつつ投稿しました。感想ご意見お待ちしております。

セレナーデ

第五話 前島ヒカリの場合1（前書き）

遅くなりました。次のお話を始めます。
新キャラも出ます。

セレナーデ

第五話 前島ヒカリの場合1

気が付くと彼女は、小夜の左頬を思いきりぶっていた。

「出てって。」

二発目は右頬。

「出てって、出てって、出てってたらあ！」

三発目、四発目、五発目。小夜の白い頬が、まるでチークを入れていくがごとく紅くに染まっていく。

隣人がうるさいぞ！と大声で注意をしたが、ヒカリは耳を貸そうとしない。

小夜を叩いている彼女の名前は前島ヒカリ。小夜が死神だと名乗った瞬間、ヒカリは恐怖のあまり顔を歪ませてしまい小夜を暴力で追い返そうしていた。

「子の刻までには休めよ、ヒカリ。」

小夜はそう告げた。返答の代わりは乱暴に閉めるドアの音だった。今夜はヒカリを一人にしよう、明日にまたもう一度話をするしかない。明日が駄目なら明後日。聞いてもらえるまで何度でも話す。

ヒカリに叩かれた頬を押さえながら、小夜はアパートを後にした。

「京、氷ある？」

「小夜、また派手にやられましたわね。」

「やっぱり飯の肉体でも痛覚があるから痛いな。」

ヒカリのアパートを後にした小夜はとある路地のたこ焼き屋の屋台の主人と思われる女性に話しかけた。

実はこの屋台は余程霊力が強い者で無い限り、訪れることはできないようになってる。

たこ焼き屋の屋台の女主人に話を戻そう。

彼女の名前は小夜も言った通り、京きやうと言う。

彼女は死後の世界の一つである地獄を治める王・閻魔大王えんまたいおうの側近である雌ねこがみの猫神である。彼女は人間に擬態することも可能であり、地獄で死神になるまで小夜の教育係をしていた。そして死神となった小夜を目付し守護することと閻魔大王に勅命を受け、小夜と共に現世に来たのである。

無論、閻魔大王の勅命が無くとも現世に小夜の様子を伺いに来ていただろう、と京は思う。京にとって、小夜は弟のような、息子のような、かわいくてかわいくてたまらない存在であるのだ。

「何があつたのか、お話して下さいませ。」

京は氷を入れた透明な袋を京に渡した。

小夜は気持ちよさそうに氷の袋を頬に寄せる。

「また依頼人を怖がらせちゃった。いや怖がられることは覚悟していたのに。」

小夜は落ちこんでいた。自分はもう人間ではない。だがやはり人間に拒絶されるのは、小夜にとっては怖いこと。

「まずは依頼人の、ヒカリさんのことを知ることが大切ですわ。」

京は穏やかな笑みを浮かべて小夜に話した。

「ああ、そして俺がヒカリの生を終わらせるまでにあいつの願いを叶えてあげたい。」

そうすることで、依頼人が自分が現世に誕生して、生をまっとうして良かったと思つて欲しい、小夜は現世に戻ってきてから常にそう考えていたのだ。

第五話 前島ヒカリの場合1（後書き）

京の言葉はお嬢様口調です。髪は濃い灰色で少しウェーブがかつたロングヘア、目は小夜と同じ青です。

セレナーデ

第六話 前島ヒカリの場合2（前書き）

ヒカリの話が終わります。彼女が最期に願ったことは・・・

セレナーデ

第六話 前島ヒカリの場合2

前島ヒカリは某有名ビール会社社長の娘として生を受けた。

幼稚園は私立。K大学附属の初等部を受験するため、幼稚園が終わった後はお受験専門の塾に通う。

日が西へ傾き始めてから、子の刻つまり、12時までとにかく勉強をする。ヒカリの努力が報われ、難関校の一つであるK大学附属初等部に首席で入学した。

入学した後も勉学は怠らなかつたため、成績はどの教科も常に一番だった。

ヒカリはその事を鼻にかけることなく、いつもは明るく笑顔を絶やすことはなかつたため、周りに人が絶えることはなく邪険に扱われたことはなかつた。将来は必ずや社長の右腕として働くことになると誰もが予想していた。

ところが、ヒカリは父親の右腕になる道が絶たれてしまう出来事が起こってしまう。

ヒカリが中等部に上がった時、クラスの副担任に性的ないたずらを受けてしまった。

幸いなことにヒカリの体は汚されずに済んだ。

事態が世間の明るみになることになると、自分の立場が危うくなるかもしれないと考えたヒカリの父親は校長と男性教諭に多額の金をやることによって、全てを白紙に戻してしまった。

だがヒカリの中では白紙に戻らなかった。ヒカリの心の中での忌まわしい出来事は、黒や灰色に塗り潰されもはや白紙とは程遠いものとなった。

相変わらず世間体と自分の地位を気にしたヒカリの両親は、様々なことを試んだ。

腕のいい心療内科医に診察させれば、ヒカリは快方へ向かう。

ヒカリの両親はそう考えた。この判断が誤りとなることも知らず

に。

ヒカリの両親は彼女をを通院させようと、彼女を力づくで自室から出した。

異変は起こった。

部屋から出たヒカリは、半狂乱状態になった。

声がガラガラになるまで泣き叫び、自分の腕を血が滴るまで何度も噛み続けた。

ヒカリを制止しようと両親が手を伸ばすと、ヒカリは両親の腕に噛みついた。

父親がヒカリの歯から逃れようと離そうとヒカリの顔を掌で殴った。すると、ヒカリはまた声がガラガラになるまで泣き叫び続けた。

両親はあらゆる策を凝らした。地方の精神病院に入院させることやカウンセリングに通わせることも考えた。だがヒカリを部屋から出す度に、ヒカリは両親や自分をズタズタに傷つけ、泣き叫んだ。

こんなことが続いては家族も仕事も何もかもボロボロになると考えた両親はある決断した。

ヒカリを家から出し一人住まいをさせることにしたのだ。

生活に困る事はなかった。両親はヒカリの郵便貯金口座に毎月仕送りを送ることを欠かさないからである。

ヒカリの両親らしい愛情の形だった。

しかしヒカリの心には両親に厄介払いをされたのだと受けとることはできなかった。

西日の差す部屋でベッドに寝転がりながら、ヒカリは『赤とんぼ』の鼻唄を歌い始めた。幼稚園の帰りに母親がよく歌ってくれた思い出の歌だ。幸せな思い出の詰まった歌。

歌っている内に、涙が溢れ、頬を伝ってシーツに染み込んでいった。

鼻唄だが『赤とんぼ』の二番を歌っていると、ヒカリと同じ鼻唄気

持ち良さそうに歌うテノールがヒカリの耳に入ってきた。

ヒカリが驚いて鼻唄を歌う主の方向へ体を起こした。

主の正体は小夜と名乗った死神。高い身長に漆黒のスーツを纏い、白髪に青い目をした男。

小夜は西日の差す窓から大きめのビニール袋を下げて不法侵入してきたのだ。

「ヒカリ、一緒に飯食わない？」

小夜はヒカリの反応はお構いなしに、ビニール袋に食材やら、飲み物やら、デザートやらをテーブルに並べ始めた。

「ちよつと、また勝手に・・・」

ヒカリは急に体に力が入らなくなり、ベッドに沈みこんでしまった。

「大丈夫か？ヒカリ。」

小夜はヒカリの額に手を当てる。適度な温度であった。

「今日何か食べたか？」

ヒカリは首を横に振った。

「多分貧血を起こしたんだろう。」

そう言われてみると今日は朝から何も食べていなかった。

小夜が持ってきた食材の匂いがヒカリの食欲を刺激する。

ヒカリは小夜を追い出すよりも先に食欲を満たす為に、食材をむしゃむしゃと食べ始めた。

「食べ終わったら、お前に何があったかを話して欲しい。お前の願いを叶えるのはその後だ。」

そう言うつと、小夜も自分の分の食材を食べ始めた。

「私は・・・私はただ、助けて欲しかったただけなのに。父さんにも母さんにも傷ついた私を受け入れて欲しかった。でも父さんも母さんも私を受け入れてくれなかった。私の人生って何だったんだの？誰か教えてよお・・・」

ヒカリはそれだけ言うつと声を上げて泣き始めた。

小夜はヒカリが泣きやむまで黙って待つことにした。

泣きたい時は泣けばいい。泣くことは、人間の心の掃除だと小夜

は考えている。

ヒカリは今まで泣くことを堪えて生きてきたのだろう。どうしても泣きたい時は自室で一人、顔を手で覆って泣いていたのかもしれない。

小夜はそう考えると胸が痛んだ。

「・・・ねえ小夜。」

ひとしきり泣いたヒカリは、お願いがあるんだと言って小夜に耳打ちをした。

明朝、空は雲一つ無く青かった。

今日のヒカリはいつもとは様子が違った。白地にバールのようなビーズ装飾のキャミソール。膝が見える長さのデニムパンツを身にまとっていた。

「・・・気持ちいい。」

玄関のドアを開けた。いつもより軽く感じたのを、ヒカリは嬉しく思った。

「知らない奴についていくなよ。」

見送りの小夜が忠告する。

「わかってるって。」

オレンジのルージユをつけたヒカリの口が楽しそうに動く。

「行ってきまーす。」

これがヒカリの最期の言葉となる。

「行ってらっしゃい。」

小夜は玄関のドアを閉め、テレビの電源スイッチを入れた。

2時間後。小夜が一番知りたい情報が流れてきた。

「今日未明、原宿の竹下通りの横断歩道で女子中学生がバイクに跳ねられ死亡しました。死亡したのは前島ヒカリさん」

小夜はテレビの電源を消し、瞬間移動でヒカリの元へ向かった。

小夜はヒカリの元にたどり着いた。

ヒカリは血にまみれて横断歩道に倒れていた。

竹下通りは突然起こった事故で周りはざわついていた。

今朝、身にまとっていたヒカリの白地キャミソールが真っ赤な血に染まっていた。

小夜はもう動かないヒカリの魂に話しかけた。

「ヒカリ、お前の願いである外へ出て竹下通りで買い物がしてみたい。確かに叶えた。」

（小夜話聞いてくれてありがとう、それとご飯美味しかったよ。）

ヒカリの魂の声を聞いた後、小夜は冷たくなったヒカリの手を握り、ヒカリの魂を吸収した。

第六話 前島ヒカリの場合2（後書き）

最近目がかすみまます。目がすごく疲れています。作家の皆さんは本当に大変なですね。お疲れ様です。

セレナーデ

第七話 再会と麻生桜音の場合1

京が開いたこ焼き屋の屋台から楽しそうな話声が聞こえてくる。もつとも、霊力が強い者でなければ聞こえはしない。

「本当に久しぶりですね。七郎次^{しゅうじ}」

「そうだよなあ。京は相変わらずきれいなお姉さんだよなあ。」

京と笑いながら話しているのは七郎次と言う。十才前半ぐらいの少年の姿をしているが、人間ではない。

彼は雄の狗神^{いぬがみ}である。

「早く入れよ。だいたいここに来るって言ったのはお前だろ、雪成。」

七郎次は自分の契約者に話しかけた。

契約者である雪成は、京のたこ焼き屋の屋台の近くにある壁に寄り添ったまま、動こうとはしなかった。

七郎次の契約者である在原雪成^{ありはら ゆきなり}とはある人物に会って話をするためにここに来た。だがいざとなると足がすくんでしまった。

とある人物とは、彼の血縁。彼と家族であった人物なのだ。過去形で語るのは、血縁であるその人物がもう既に彼岸に渡ってしまったからである。それも原因の1つではある。だが根本に隠した原因は彼が恐ろしいから。

しかし、逃げていても事は進まない。

雪成は大きく深呼吸をし、意を決して屋台に入った。

「よくいらつしゃいました、雪成様。」

雪成の青い両目が大きく見開かれた。

雪成に声をかけたのは、屋台の主である京でも自分と契約している七郎次でもなかった。

「……正雪兄さん。」

「久しぶり……雪成。」

何年かぶりの兄弟の再会だった。

正雪いや小夜と雪成は一卵性で生まれたため、顔立ちは瓜二つだ。髪の色、変えたんだぜ？似合うだろ？」

小夜は悪戯っぽく自分の白髪を指す。

「うん。これではつきり俺と見分けがつくようになったね。……正兄」

雪成は顔を赤らめた。兄を生前の愛称で呼んだのは久しぶりで照れ臭かった。

だが即真顔に戻り、聞きたいことがあつてきたんだと言った。

「何だ？」

雪成は、1枚の写真を小夜の前に差し出した。

そこには制服を身にまとった少女が写っていた。

小夜の青い両目が大きく見開かれた。

少女は小夜の依頼人だった。

忘れるはずがない。彼女は小夜を悩ませた依頼人の1人だったからである。

「麻生……桜音」

「やっぱり知っていたんだね。」

「ああ、俺が……彼女の願いを叶えた。」

「命と引き換えに？」

小夜はうなづいた。

「・・・酷いことを。」

「彼女の、桜音の願いを叶えたかったから。」

「・・・それが、今の正兄の仕事？何のために？」

「俺がもう一度生まれ変わるチャンスを得るために。」

雪成は小夜に掴みかかった。

「殴りたいなら殴れ。」

「かっこつけんな！本当は自分の罪を償うためだろ？」

「それもある。」

「俺も自分自身の罪を償うために、生きているんだ。互いを傷つけあつた正兄とまゆ姉を傍観し続けたことを償うために生きていますだ！これを見ろよ！」

雪成はシャツの袖をまくった。赤い、切り傷だらけの左腕が小夜の両目に飛び込んできた。

「これは。」

「ああ！そうさ！じぶんで切ったんだ！」

小夜は弟の切り傷に触った。ざらついていた。

「・・・今度は俺の前で切ってくれ。かっこつけさせてもらうけど、お前と痛みを分かち合いたい。今更だけど兄貴らしいことしたい、だから。もう1人で切るのはやめてくれ。」

関わるなとは言いたくなかった。

弟が心に傷を抱えたまま生きている。

それは、兄であつた小夜のせいでもあつた。

雪成の姉であり小夜の妹でもあつた麻雪を心身共に傷つけた。

それを傍観し続けることしかできなかった雪成に何か償わせて欲しい。

甘ちゃんだ。と罵られても構わないから償わせて欲しいんだ。

小夜の両目が言っているように見えた。

雪成は小夜を掴んでいた手を話した。

生前の兄とは別人のようだ。

今の兄はまるで、温かく包みこむ父親のようだ。

雪成の記憶に僅かに残る父親が今の兄の中に生きているように感じた。

雪成は黙って屋台の席に座った。

雪成が座ったのを見届けた小夜は、麻生桜音のことについて話し始めた。

雪成が座ると小夜は、麻生桜音のことを話始めた。

第七話 再会と麻生桜音の場合1（後書き）

今回のお話から『墮天使が奏でる鎮魂歌』とリンクさせています。

セレナーデ

第八話 再会と麻生桜音の場合2（前書き）

遅くなりました（汗）更新しました。

セレナーデ

第八話 再会と麻生桜音の場合2

愛している人と一緒に死にたいと彼女は言った。

小夜は願いを叶える力を持った特別な死神だ。

例え相手が命を捨てることを願ったとしても、相手が願った以上叶えなくてはいけない。

できないとは言えないのだ。

それを言えば自分が特別な力を持った死神としては意味を成さなくなる。

彼女は、麻生桜音は小夜を困らせたが、存在する意味を身をもって教えた存在だった。

麻生桜音は他人には軽く話せない過去を抱えて生きていた。

小学生の時に某犯罪組織に拉致された。

故郷から離された所で、彼女を含めた多くの少女たちが他人の命を奪う術を叩きこまれ、失敗すれば虐待を受けることとなった。

暗い世界で生きていた彼女がようやく母国に帰ることが出来る年になった時、桜音は絶望と哀しみを痛いほど刻みつけられていた。

他人の命を奪う術を叩きこまれた彼女は、感情の無い、生ける兵器に育ってしまった。

家族とうまくやっていけなくなった桜音は学生寮に付きの学校に入った。

だが無感情な彼女が容易に心を開けるはずもなく、学校でも学生寮でも孤独だった。

そのような境遇の自分を愛し愛される存在を桜音は見つけた。

煮詰まり、孤独に耐えきれず夜の繁華街で罪を犯そうとしていた自分を見つけたし、彼は止めてくれた。

始めは、体を重ねるだけの関係がいつしか互いに愛しく思う関係に変わっていた。

彼は、その少年は自分と同じ年齢だったが実の母親から虐待を受けて育つたため、桜音と同じで他人の愛し方を知らなかった。

学校で優等生を演じること、自分の中に眠る孤独を埋めていた。桜音も彼も自分も他人も信じることができない。

絶望しか見い出せなかつた毎日を送ることに疲れていた。

「あんたは死神やる？私にはあんたが見えるし話せる。私は死にたい。私の一番愛している男、神楽漣と一緒に死なせて欲しいねん。」
小夜は困った顔を見せた。

「死にたいなんて願いを叶えてええのかって迷ってるんか？迷わなくてええ。小夜がどんな願いも1つだけ叶える言つた以上、他人の魂を代価にする以上あんたが叶えなければあんたの存在は嘘や。」
桜音が持つ強い光を放つアーモンドの形をした両目に思わず小夜は怯んでしまった。

「か・・・彼も死を望んでいるのか？桜音。」

「倫理観を無視した存在があんたやない、小夜。」
桜音は強い光を弱めることなく小夜に投げかける。
倫理観を無視した存在。

それが死神である自分。

これも自分の罪を犯した代価だと言われているような気がした。

「麻生桜音、お前の願い。自分が一番愛する男である神楽漣かくらみおと一緒に死にたいという願いを叶えよう。」

ありがとう、と桜音は言った。

瞳が放つ光が穏やかなものに変わつた。

「その後2人で一緒に死を迎えさせた。優しくてきれいな顔をして、冷たくなっていった。死ぬことで2人に希望を見い出させた、俺はそれ以来自分がしていることが正しいのかを常に考えている。いや、忘れないようにって言った方が正しいだろうな。」

「……疲れてないの？正兄は。」

「何に？」

「今の仕事と常に正しいのかを考えていることにだよ。」

「疲れたって言ったなら、麻生桜音と神楽漣に失礼だ。」

強く穏やかな両目で弟の雪成を見返した。

「後になって麻生桜音と神楽漣の観ていたと思われるビデオが発見された。今の話で納得させられたよ、文楽人形が演じる曾根崎心中だったんだ。徳兵衛とお初は麻生桜音と神楽漣の憧れだったんだ。正兄の仕事は、麻生桜音の願いを叶えた正兄を俺はやっぱり酷いと思う。」

雪成の見返した瞳は、小夜に生前の麻生桜音を思い出させた。

そして、グレーのスーツから剃刀をだすと自分の腕に新しい切傷を作った。

「俺を傷つけたのは正兄だよ。だから弟のわがままを聞いて欲しい、俺と痛みを分かち合っただけで欲しい。また来るね。」

雪成は七郎次を連れ席を立った。

「だけど、と正雪いや小夜は思った。」

死神の自分と関わったら雪成を彼岸に導くのではないかと。

「俺はまだ死にたくないよ、だから俺は正兄を小夜とは呼ばないね。」

「
そう言って、一枚の紙を見せた。
護府だった。」

「俺が今の父は密教僧なんだ。今日ここに来る前に教わって書いてきたんだ。」

雪成は笑顔をみせ、京さん、兄をよろしくお願いします。と手を振って屋台を離れた。2つの影がだんだん小さくなっていく。

小夜は勇気を振り絞った。

「七郎次！弟をよろしくお願いします！」

小夜は頭を垂れた。それが小夜から自然発生したものとわかった七郎次は嬉しくなった。

七郎次はまかしとけ！と力強く言った。

小夜が頭を上げると2つの影は見えなくなっていた。京も嬉しそうに微笑みながら、小夜を見ていた。

第八話 再会と麻生桜音の場合2（後書き）

くどくなつたかなと少し反省しています。ちなみに雪成は小夜と同じ顔をしてますが髪は黒で銀縁眼鏡をかけています。七郎次の外見は特に決めてません（汗）

最終話 できること。(前書き)

今回が最終話です、今までお付き合い頂きありがとうございました。

セレナーデ

最終話 できること。

月が夜空を照らしていく。

人の手で作られたネオンはただただ明るいただけだが、自然の手で作られた光はどこか優しさや温かさを含んでいる。こればかりは人の手では作れないだろう。

あら？

京は屋台付近に気配を感じた。

いつも共にいる者の気配である。

「京。」

「おかえりなさいませ、小夜。」

「話があるんだ。」

私もですわ、と言って1台のミルクホワイトのノートパソコンを小夜の前に差し出した。

「主上からです。開いてご覧になって下さい。」

主上とは、地獄の最高統治者である閻魔大王のことである。

閻魔大王の配下は、

「主上」

と呼ぶのが地獄の決まりである。

曲がった背筋を伸ばし、小夜はそっとパソコンを開いて電源のボタンを押した。

《メールが1件届いております。》
と画面に出ていたので、付属のマウスでクリックした。

《やあ小夜。元気にやっているかい？直接君に伝えたい所だけれど、僕は動けないから電子メールで伝えるね。君が弟さんと関わっているのを、こちらでも心配で感じさせてもらったよ。君には酷だけれど、君の弟は現世に生きる人間、君は地獄の死神。あまり長く関わるのは、君にとっても彼にとっても悪い影響を及ぼす。君の願いである、転生を望むのであれば尚更彼と関わるのはよくない。再度確認してほしい、君が関わっているのはもうすぐ死期を迎える人間のみだ。辛いだろつが、よく考えて欲しい。》

P.S

君が54人の魂を集めたら転生を地獄の皆で検討する・・・このことは覚えているよね？今計算してみた所、今日で丁度27人目だ。
おめでとう。》

「そっか、もう27人の魂を集めたのか。」

小夜は哀しい瞳をして笑った。

「京」

小夜はノートパソコンから前にいる京へ話しかける。

「俺、雪成に手紙を書くよ。会っちゃいけないなら、せめて手紙であいつに関わりたい。」

「そう言つと思いましたわ。」

「罰を受けるかもしれない。もう転生の話は白紙になるかもしれない」

い、でも！それでも、俺は兄貴としてあいつにしてあげられることをしたい。」

小夜はそれが自分のエゴだと理解しているが、今、弟に何かしてあげなければ後悔すると思う。

自分の犯した罪は変えられない。弟を天涯孤独にしたのが自分だからこそ、弟のトラウマを何かしらの形で癒す手伝いをしたい。

京は小夜に雪成の兄としての顔を見た。

「それじゃ、28人目行つてきますか。」

「はい、行つてらっしゃいませ。」

緑が生い茂つた公園を、1人の男が歩いている。
両手には赤ん坊を抱いていた。

「いい天気だね、正広。」

男は笑顔で息子の名前を呼んだ。

正広と呼ばれた赤ん坊は青い空にしきりに手を伸ばしている。

「空が好きかい？正広。」

正広はあうあうと言った。

まるで男の言葉を理解しているかのごとく。

「本当にありがとうございます、主上、京。これからは雪成と一緒に、生きていきます。お世話になりました。死神 小夜より。だそうです、主上。」

「ふふっ小夜らしいね。結局弟へ手紙を書く暇がなくて僕たちに手紙を残して雪成の息子として転生した。」

「ええ。これからは2人で、幸せを掴んでいって欲しいですわ。」

京の瞳に涙が光った。

「京、寂しい顔をするこたないよ。本日付けで君には新しい死神の教育係に就いてもらう。」

閻魔大王の手には、1枚の写真が握られていた。

小夜そして雪成とよく似た不敵に笑う女性が写っていた。

(神威いや最勝寺麻雪、これからは君が魂を癒す番だ。)

閻魔大王の口元が弧を描いた。

セレナーデ

終り。

最終話 できること。(後書き)

これからは、正雪の妹麻雪が死神として小夜と同じように働くことを作者も期待します。3つ子よ、穏やかに生きていっておくれ。そしてくだいですが、ここまで読んで頂きありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7978a/>

セレナーデ

2008年11月7日09時03分発行